



『古今和歌六帖標柱』 翻刻(八)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 一男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005216

『古今和歌六帖標注』翻刻（八）

北海道教育大学旭川校国文学教室

伊藤 一男

○本稿は、『古今和歌六帖標注』翻刻（一）（『旭川国文』第二三三号 一九九七年一月）『古今和歌六帖標注』翻刻（二）（『語学文学』第三六号 一九九八年三月）『古今和歌六帖標注』翻刻（三）（『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第四九卷第一号 一九九八年八月）、以下、同紀要、第五〇卷第一号（一九九九年八月）・第五一卷第一号（二〇〇〇年八月）・第五二卷第二号（二〇〇一年二月）・第五二卷第一号（二〇〇一年九月）所載の（四）（七）を受けるものである。

せき

一〇二六 八雲たついづもの国のでまの関てまをうけそよまじればいかなるてまに君夫さはるらん

〈夫雑三九五二〉よみ人しらず・奥三五五〇・色二二九〇

【頭】『堀河院百首』（八六八） 源朝臣師頼

さりともとたのめしかども八雲立てまの関にも秋はとまらず

一〇二七 まてしばし人しりみんや我せこをとゞめかねてぞてまと名づけし

一〇二八 逢ことを苗代水にまかせてはこさんこさじはを山田武の関

〈夫雑三九五三〉よみ人しらず

一〇二九 河口伊のせきのあら垣まもれどもいでゝわがねぬしのびせまのちがきくに

〈催〉

一〇三〇 かはぐちの関のあら垣いかなればよるのかよひちをゆるさざるらむ

〈新千恋三二九五・代恋三二九〇〉夫雑三五五二よみ人しらず

一〇三一 立よらばかけふむばかりちかきまにあひみぬ関を誰かすゑけん

一〇三二 あからてまの小嶋の関のかためてはしいもが心はうたがひもなし

〈夫雑三九五六〉

【頭】『万葉』四（五三〇） 聖武天皇御製

赤駒アカコノ之越コノ馬柵ウラマセ乃緘シメユヒシ結イモガコ師コノ妹ウツカヒモ情ナシ者シ疑ヒ毛モ奈思ナシ

はら

一〇三三 かみつつけやいちしの原のいちじるく我あみしてと松葉しみえて人にしらるな

一〇三四 君が大きるみかさの原に和る雲のたえててはつかるわ新かるゝ恋もかするかな万

〈万十一二六七五〉新千恋三二四二・夫雑四九九〇よみ人しらず・古本

『人丸集』五五三三・第五三四六三重出

一〇三五 朝日さすあさぢが原の霜よりも消て恋しきふるきことのは

山上のおくら〔伝未詳〕

一〇三六 名にしおへばいづれもかなしあさなくなで、おほしうなる子が原

【頭】『枕草紙』「原は」といへる条に「うなるこが原」とみゆ。

一〇三七 こひしくはみかたの原を出てみんまた朝顔の花はさくやと

〈夫秋二種(一〇三七)ふかやぶ〉

をか

一〇三八 秋風の日ごとにふけば水ぐきの岡の木の葉も色付にけり

〈万(二二九)・拾雅秋(二二四)・夫秋五葛(五八〇)・又雑三岡(九〇八)よみ人

しらず・『人丸集』(二二六・三三二・五〇五)〉

【頭】『玉葉』秋上(五九三) 人丸

かりがねのさむくなるより水ぐきの岡のくず葉はいろづきにけり

びはの左大臣〔照宣公男仲平公〕

一〇三九 みこしをかいくそのよに年をへてけふの行幸を待てすぐらん

〈後雑(二二三)〉

【頭】『袖中抄』卷十六云「みこし岡とはとき林の西にあり。嵯峨の行幸

のとき、みこしをかきすゑてまつる所也云々」。

一〇四〇 みちのくに有といふなるかたこひの岡をわが身にそふるころかな

一〇四一 君が代もわがよもしらず岩しろの岡のかやねをいざ結びてん

〈万(二二〇)中皇命・夫雑三九(三三六)よみ人しらず・第五(五八〇)重出〉

一〇四二 みちのくのつゝじの岡のくまつらつらしと妹をけふぞしりぬる

〈夫雑三九(二六四)よみ人しらず〉

【頭】『蜻蛉日記』(台道綱母集)六

みちのくのちかの島にて見ましかばいかにつゝじのをかしからまし

『本草和名』云「馬鞭草、蘇敬注云、穂類、鞭鞘、故以名之、和名久末都々良」。

一〇四三 足曳の山なしをかゆく水のたえずぞ君を恋わたるべき

〈続古恋(二〇四六)よみ人しらず〉

一〇四四 ふな岡のともへにたてる白雲の立わかるゝもあはれとぞ思ふ

一〇四五 あはぬ身をうしやの岡にかりはすれどなをだに立ぬ鳥にも有哉

もり をのゝこまち

一〇四六 大荒木のもりの下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし

〈古雑上(八九二)よみ人しらず・新撰(三〇五)・朗(四二)重之・第六(三三七)重出〉

一〇四七 人しれぬ思ひするがの国にこそ身をこがらしの森は有けれ

〈新後拾恋(一九五七)よみ人しらず・夫雑四(二〇七四)〉

【頭】『新古今』恋四(二三〇) 定家朝臣

きゝわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露

一〇四八 山城のいはたのもりの柞原いはねど秋はいろつきにけり

〈夫秋六柞(六〇六)よみ人しらず(夫雑四森九九八四)〉

きのらう女〔鹿人大夫女〕

にほに夫

一〇四九 いづみなるしのだの森のくすの木のちえに別れて物を杜思へ
〈同雑四二〇九三よみ人しらず〉

一〇五〇 君こふと我こそむねをこがらしのもりとはなしに陰になりつゝ
〈同二〇七五〉

一〇五一 ふく風になびきもせ^しな^ん思ふこと我にい^はせ^の森のした草

〈続後撰恋三六二大伴郎女〉

一〇五二 いとはやも鳴ぬる鷹か^がの森木にはふ^{つた}葛^ももみぢあへなくに

〈夫秋六葛六三三よみ人しらず〉

【頭】『古今秋上』二〇九 　よみ人しらず

いとはやも鳴ぬる雁かしら露の色どる木々も紅葉あへなくに

一〇五三 おもふこと何をかささらにみ山なるし^げりの杜^を我^としらなん
〈同二〇〇〇〉

一〇五四 妹が家にいくた^りの森の藤の花今^こん春もかくこそはみめ

〈万十七三九五二・夫春六藤花二〇三三・又雑四九九九よみ人しらず〉

一〇五五 きくからにもゆる思ひは山城の石田の森に鳴よぶごどり

〈夫春五呼子鳥二八三五よみ人しらず〉

一〇五六 かたこひの森のことは散ぬれどおもひの山^のまつぞかはらぬ

〈夫雑四二〇〇三よみ人しらず〉

【頭】思ひの山、名所にあらず。こは「おもひはやまぬ」といふを「端山」
にいひかけたるなれば、『夫木』のかたよろし。

一〇五七 立田山^川たちなば君が名を惜み^いは^せの森のい^はじとぞ思ふ
〈後恋六二〇三三元方〉

一〇五八 かつ見つゝいはねの森にすむ蟬^は時^をし^らずや鳴渡るらむ

〈夫夏三蟬三九五二・又雑四九九八よみ人しらず〉

一〇五九 つらきをもいは^の山^の杜^の下に生る草の袂ぞ露けかりける

〈新勅雑四二三四よみ人しらず〉

【頭】いはねの森、未勅。但『新勅撰』に「いはでの山」とあれば、「い
はで」のあやまりにもやあらん。

一〇六〇 我門の早田もいまだかりあげ^へね^にばかねてうつろふ神^なびの森
いへのおとぐるまる〔此名誤れり〕

〈家持集〉（一八五五三三）

【頭】『古今』秋下二五三 　よみ人しらず

神無月しぐれもいまたふらなくに下同

一〇六一 神無月時雨にそむ^めるもみぢばを錦におれる神なびの杜
貫之

〈家一五〇五五八九〉

一〇六二 人につくたよりだになし大荒木の森の下なる草の身なれば
みつね

〈後雑二二二八〇・家一七九五二九七三〇三六六・第六三五七六重出〉

【頭】『拾遺』雑春（一〇八一） 　みつね

いたづらにおいぬべらなり大あらきのもりの下なるくさばならねど

たぐみね

一〇六三 おほあらぎの杜の草とや成にけんかりにきてとふ人のなき哉だにきてとふ人のなき後

〈同二七六・家一四七五二一・五六九〉

社

一〇六四 ゆふかけていの三室の神さびてたゝるにしあればねぎぞかねつるいむにはあらず人めおほみこそ

〈万七二三七七〉

【頭】此「ゆふかけて」のうたも、例の二首を一首に書あやまれる也。

『古今』誹諧(一〇二二) よみ人しらず

いそのかみふりにし恋の神さびてたゝるにわれはいねぞかねつる

此うた、『拾遺』恋四(八六一)にふたゝび出たるには、「ねぎぞかねつる」とあり。

一〇六五 ちはやぶる神のいがきも越ぬべし今はわがみのをしからなくけくもなし万拾家

〈同十一二二六三・拾恋四九四四人丸・人丸集一九〇・二三四〉

【頭】『伊勢物語』(一一二〇)

千早振かみのいがきもこえぬべしおほみや人の見まくほしさに

(一〇六六) かつまたの池にとりあしむかしよりこふるいもをぞけふいまにみぬ

一〇六七 我みても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらん住吉

〈古雑上(九〇五)よみ人しらず・新撰(三三三)・伊(一九八)・朗(四二八)〉

よみ人しらず

一〇六八 ちはやぶるかもの杜のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし山城

〈古恋一(四八七)・新撰(三五二)〉

やかもち

一〇六九 天地の神をねぎつゝ我恋る君にかならずあはざらんやめ万

〈万十三三三八七〉

一〇七〇 いにしへのかみの御代より逢けらし今のこゝろもとこわすられず

〈同(三三九)〉

一〇七一 千早振神なび山のもみぢばに思ひはかけじうつろふものを大和

〈古秋下(二五四)よみ人しらず〉

一〇七二 まきもくの穴師の山の山人とひとみるがねやまかづらせよわももしが神

〈古大歌所(二〇七六)・神〉

【頭】『袖中抄』卷九云「山かづらとは、神楽するに、まさきのかづらにてかしらをゆふを山かづらといふ云々」。

人麻呂

一〇七三 いがきして守る社のもみぢばもしめをばこえて散てふものをはよりがいはよ万人

〈万十(三三〇九)・人丸集一五七五二八四二六二〉

一〇七四 石のかみふるのやしらの杉村のおもひすぐべき君ならなく大和

〈同三(四三三)丹生王・夫雑一山(八六四)よみ人しらず〉

【頭】『万葉』四(六六八) 厚見王

朝尔日尔色付山之白雲之可思過君尔不有国アサニケニ

一〇七五 かみつよのいがきにはへる諸かづらこなたかなたにむけてこそみれ

一〇七六 ゆくがうへにまたもゆけ駒神かけや三室の山の山かづらせん

〔貫之集〕(一四六)・夫雑(二八八四三)

一〇七七 人もみなかづらかざして千はや振神のみあれにあふひなりけり

〔同(一三〇)・同夏一神楽(四八二)(代五三三)〕

【頭】『河海抄』藤裏葉巻云、「賀茂祭前日於垂跡石上有神事、号御形、御阿礼、御生也云云」。

『花鳥余情』云、「ミアレハ玉依姫ノ別雷神ヲ生玉フ所ヲ云ニヤ云々」。

宣長云、「あれ」はつかへまつるをいふ詞也。
『類聚国史』天長八年十二月替加茂斎内親王、其辞曰「皇大神乃阿礼乎止売云云」。また『三代実録』貞観十九年二月廿四日加茂神社斎内親王を定め給へる告文に、「敦子内親王乎卜定天阿礼乎度女進状云云」。
『万葉』に「阿礼衝」といふ詞、所々にあり。是もつかへまつりいつくをいふ也。

一〇七八 あれびきに引つれてこそちはやぶるかもの川浪立わたりけれ

〔同(一四四)・同夏一加茂祭(三五三)よみ人しらず〕

一〇七九 春霞たちまじりつゝいなり山こゆる思ひの人しれぬ哉

〔同(一三六)〕

以上四首

いせ

一〇八〇 いなり山行かふ人は君がよをひとつこゝろにいのりやはせぬ

〔伊勢集〕(一〇五五)(九五〇八八)

貫之

一〇八一 かきくもりあやめもしらぬ大空にありとほしをばいかゞしるべき

ありどほしの神のもとにてよめる

〔家(一八〇)〕

【頭】『俊頼口伝』上(七二)

天雲のたちかさなれるよそなればありとほしをばおもふべきかは
『枕草紙』「社は」といふ条に、「あり通しの明神、貫之が馬のわづらひけるに、此明神のやませ給ふとて歌よみて奉りけんによめ給ひけん、いとをかし」とみゆ。猶「蟻通」と名つきたる故よし、七わだにまがれる玉にをぬきたる事、又、この明神の、

七わだにまがれる玉に緒をすげてありとほしともしらずやあるらんとよみ給ひし事などくはしくしるせれど、いと長ければはぶきつ。

『祖庭事苑』「池陽問」云、世伝孔子厄於陳穿九曲珠遇桑間女子授之以訣云密尔思之。思之密尔孔子遂晝乃以糸繫螳引之以密而穿之云云。

みち

一〇八二 紅のすそひく道の中に置て我や行べき君やきまささん

〔万十一(二六五)・古本『人丸集』(五四七七)・夫雑(二九三〇)よみ人しらず〕

一〇八三 いそのかみふるの中道なかくに見ずは恋しと思はましやは

〔古恋四(六七九)貫之・家(一六七五)〕

一〇八四 月清み妹に逢んとたゞちからわれはくれども夜ぞ更にける

〔万十一(二六八)・古本『人丸集』(五四六七)〕

一〇八五 とゞむとも猶かよひなん玉はこの道せばきまてしげき我恋

一〇八六 いにしへの野中ふる道あらためばあらためられよのなかふる道
かしはばらのみかど〔光仁天皇御子〕

〈史〕『日本後紀』三

【頭】『類聚国史』曲宴云、「延暦十四年、天皇〔桓武〕誦古歌曰「以
邇之幣能云云」。かくあれば、此うた、天皇の御製にあらす。

一〇八七 道すがら時雨にあひていとどしくほしあへぬ袖をぬらしつる哉

〈貫之集〕(一三六)

みつね

一〇八八 行やらぬ心や何ぞ秋の野の道は千里もあらじと思ふを

〈家〕(一八二四〇三二四四七三二〇)・第五(二七八六重出)

一〇八九 玉ぼこの道のちまたに妹まつと立たるほどに夜は更に覺

つらゆき

一〇九〇 夏山のかげをしげみや玉ぼこの道ゆく人も立とまるらん

〈拾夏〕(三〇貫之・家(一))

【頭】『新古今』夏(一八八) 藤原元真

夏草はしげりにけりな玉ぼこのみちゆく人もむすぶばかりに

一〇九一 わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をこふとせしまに

〈古恋五(七七〇)遍昭・家(三五)・朗(三三)・卅(五)〉

一〇九二 玉鉾の遠みちをこそ人はゆけなどか今のまみぬは恋しき

〈拾恋二(七七三)貫之・家(一七四七八六)・『家持集』(一八五五九九)〉

一〇九七 たまぼこの道行人もみえなくなげきをしつゝ出きつるかも

つかひ

【頭】契沖云、「使」は人倫なり。さるをこゝに出せるは、つかひは、
まのあたりあはで道のあひだ有人の文をもうたをもつたふるが故なり」。

一〇九三 心にはちへにしきく思へどもつかひをやらんすべもしらなく

〈万十一(二五五)〉

(一〇九四) かくばかりわれはこひつたたまぼこの君がつかひをまちやかねてん

一〇九五 人ごとをしげくて君に玉鉾の使もやらすわすると思ふな

〈同(二五八)〉

一〇九六 わぎも子やいたくなわびそ玉ぼこの使かよはぬ物ならなくに

一〇九八 恋しねとするわざならし玉鉾の使もみえずなりゆくみれば

【頭】『万葉』四(二二七〇)

恋死 恋死 耶玉梓 路行人 事 告無

一〇九九 家人は道もしみゝにかよへども我まつ妹がつかひこぬかも

〈万十一(二五五)・夫雑七(二六六)よみ人しらす〉

一一〇〇 たれかれとはどこたへむすべをなみ君が使をかへしつるかな

〈同(二五四)〉

一一〇一 我恋のことしかたらひなぐさめん君がつかひを待やかねてん

〈同(二五四)・古本『人丸集』(二五四)〉

二〇二 わがやどの早田に五持かりあげてかへすともきみが使はたごには持をかへしはやらじ
《家持集》(五三九)

うまや

二〇三 東路のうまやくとかぞへつゝあふみのちかくなるが嬉しさ
《夫雜十三(四八七九)よみ人しらず》

《夫雜十三(四八七九)よみ人しらず》

【頭】『大和物語』云、「しのづかのうまやといふ所より、たよりにつけ

て云々、(一〇二)

しのづかのうまやくとまちわびし君はむなしくなりぞしにける

『童蒙抄』九云、「ウマヤ〜」ハ、「イマヤ〜」ナルベシ。

二〇四 あづまぢの里の遠さもあらなくにうまやくと君をまつ哉

春の田

二〇五 木のめあづまぢはる春のあら田やま後を打かへし思ひやみにし人ぞ恋しき
《後恋一(五四四)・拾恋三(二八二)よみ人しらず》

《後恋一(五四四)・拾恋三(二八二)よみ人しらず》

二〇六 あらを田をあらすきかへし〜てもみてこそやまめ人のこゝろを
《古恋五(八二七)よみ人しらず》

《古恋五(八二七)よみ人しらず》

つらゆき

二〇七 わすらるゝ時しなれば春の田を拾家のかへす〜ぞ人は恋しき
《拾恋三(八二二)・家一(四三)『元輔集』(二二二)》

《拾恋三(八二二)・家一(四三)『元輔集』(二二二)》

【頭】『古今』恋一(五二五) よみ人しらず

から衣ひもゆふぐれになるときは下田

二〇八 春の田を人にまかせて我はたゞ花に心をつくる比かな

《同春四七(齊宮内侍・朗(五六九))》

二〇九 足曳の山いろの桜の花夫家みてぞをちかた人はたねも家はまきける

《夫春五苗代(二八五)貫之・家(一五三)》

【頭】同旋頭歌(一〇〇七) 同

打わたすをちかた人にもをすわれそのそこにしろくさけるはなにの

花ぞも

已上三首

貫之

二一〇 おりたてば身こそほつれ春の田のふみかくことも今はやめてん

夏の田

二一一 わぎもこがあかもぬれつゝうゝる田らして拾丸を刈まじ拾丸てをさめんくらなし未助の浜

《万九(二七〇)・拾雜秋(二三三)・『人丸集』(五七五)六八〇・第三(九三三)重出》

貫之

二一二 時過は早田もいたく老ぬべし雨にも田子はさはらざらん

《続古夏(三三五)・家(一四九)・朗(五七〇)代(五二二)》

【頭】『桂海蠻志』云、「民戸強壯可教勸者謂之田子田丁。」

秋の田

二一三 秋の田のほに出しでぬ集ぬれば打打むれて里とほみよりかりぞきにける
《貫之集》(一六二四)

《貫之集》(一六二四)

二一四 雲がくれ鳴なるかりの行むら万てゐるみん秋のたのほも家うき田だち万のほむき繁繁くしぞ思ふ

《万八(二五七)家持・家(一四二)三三》

二二五 秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心にわすれしもせん

〈古恋一(五四七)よみ人しらず〉

いはひめのきさき〔葛城襲津彦女〕

二二六 あきの田のほのへきりあふ朝霞いづれのかたに我こひやまん

〈万(二八八)〉

みつね

二二七 ひとりして物をそ思ふ秋の田のいなばのそよといふ人もなし

〈古恋二(五八四)・新撰(三七〇)〉

【頭】『曾丹集』(一二〇四)

木がらしの秋とたちにしその日よりいなばのそよといはぬ日ぞなき

素性

二二八 人こゝろ今はあきたのほどなれば稲葉の露の思ひけぬべし

〈新続古恋二(二〇三)〉

二二九 秋の田のほなみおしわけ置露の消えもしなゝん恋て逢すは

〈万(三三五)・第一(五六六)已出〉

二三〇 我門の早田もいまだ刈あげぬにけさ吹風に馬はきにけり

〈順集』(二四四)二五九〉

ほづみのわうじ〔天武天皇御子〕

二三三 秋の田のほむけのますらかたよりに君がよりなは心地よぐらん

〈万(二二四)〉

冬の田

二三三 あきはてゝ人も手ふれぬひつちほの我心もて生出るなり

【頭】『和名抄』稻類『唐韻』云。穠〔音呂。』後漢書』読於呂賀於比。俗云比豆知。自生稻也。〕

二三三 心もておふる山田のひつちほの君まもらねどかる人もなし

〈後秋上(二六九)よみ人しらず〉

かりほ

二三四 秋田かるかりほを見つゝこきくれば衣手寒し露置にけり

・『家持集』(一四二・二二三)〉

・『家持集』(一四二・二二三)〉

みつね

二三五 み山田のおくてのいねをほしわびて守るかりほにいくよへぬらん

〈拾雅秋(二三五)・代秋下(二〇六)・家(二二三・二二四)・夫秋三秋田

(五〇〇六)〉

つらゆき

二三六 かりほにてひさにへにけり秋風に早田かりがねはやもなかなむ

〈代秋上(六九九)・家(一五三)〉

二三七 秋はぎをかりほにつくり庵してあるらん君とみるよしもがな

〈万(三三四)〉

二三六 たづがねの聞ゆるなへにいほりして旅にありきと妹につげなん

〈同(三四九)・玉旅(二五八)〉

天智天皇(舒明天皇御子)

一一五 秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

〔後〕秋中(三〇三)

【頭】此御歌につきて説々あれど、そは『改観抄』『うひまなび』等にくはしければ、こゝにはもらしつ。

いなおほせ鳥

【頭】『和名抄』羽族名「稲負鳥、『万葉集』二云(其読以奈於保世止利)」。今按ずるに、いなおほせ鳥、『万葉』にみえず。こは『新撰万葉』といふべきを、「新撰」の二字おちたるなるべし。

たゞみね

一一三〇 山田守秋のかりほいにおく露はいなおほせ鳥の涙ななりけり新

〔古〕秋下(三〇六)・新万(二四九)・家(一三五・一五六・一四四・一四八)

人丸

一一三一 我宿に稲負せどりの鳴なへにけさふく風に鳶トビは来にけり

〔同〕秋上(三〇八)よみ人しらず

そほづ

【頭】『古事記』神代卷云「久延クニノビ毘古者、於オケ今山田之曾富ソノトヨ騰者也。此神者、足雖不行タラシ尽知トシラ天下之事也云云」。宣長云、「さて「曾富騰」は、後の歌に「曾富豆」とよめるものにて、『奥義抄』に、「田におどろかしに立たる人形なり」といへり云々」。

一一三二 そほづたつ山田の池は今も猶心ふかしなうき世セはあれど

〔夫〕秋三秋田(五〇四)よみ人しらず

一一三三 秋の田にたぬはかりぞ君こふる袖のそほづにならぬ日はなし

【頭】『後撰』秋上(二六八)

よみ人しらず

あけくらしまもるたのみをかゝせつゝたもとそほづの身とぞなりぬる

一一三四 あし引の山田にたてるそほづこそおのがたトモのみを人にかくなれ

春の野

一一三五 草も木もみどりにみゆる春の野に雨ふりそめば色や増らん

つらゆき

一一三六 春ふかく成ぬるときの野べみれば草のみどりもいろまさりけり

〔家〕(一三六)

一一三七 駒うまなべてめもはるのゝにまじりなん新・千・代・並若なつみつる人ふ千・代・並もありやと

〔続〕千春(三三四)ふかやぶ・代春(三六〇)・雲春(三三四)貫之・寛(三二)・新万

(二三)作者不知

一一三六 なかくナカクに何あひみけんナニアヒミケン春日野ハルノノのやくるほワをよそにみましを

〔万〕十二(三〇三)

一一三九 春の野にわかなつまんとしめしコシホノのちりかチリカふ花ハナに道ミチもまどひぬ古・寛

〔古〕春下(二二六)貫之・寛(八)

一一四〇 わすらるゝ時しなれば春日野ハルノノのとふトひありやと待ぞわびしき

【頭】『斎宮女御集』(I一〇四・II五六・III四八・IV一七)

春日野の雪の下草人しれずとふひありやとわれぞまちつる

冬の野

小町があね

二五 霜がれの人とわがみを思ひせばもえても春をまたましもを
〈古恋五七九〉・家〔伊勢集〕二九六・二九一・二九二

二五 かの野べいともかくなる峯の上の松がえとも久しき物を

ざふの野

二五 冬ごもり春の大野をやく人はやきやかねばや人のむねやく
〈万七二三六〉

二五 むさし野の草のゆかりと聞からにおなじのべともむつまじかな

二五 あふことのいなびのにすむ鹿こそはかりの人には逢じとぞ思ふ
〔夫雑四九八三〕よみ人しらず

そせい

二五 わするやと野に出てみれば花ごとにふくめる物はあはれ也けり

二六 はつかにも人を見まくのすき野のほに出て今ぞ恋しかりける
〔夫雑四九八三〕よみ人しらず

【頭】『玉葉』恋四二四五 貫之

秋風のいなばもそよにふくなへにほに出て人ぞこひしかりける

二六 印南野のあさぢおしなみさねしよのけながくあれば妹こそ思へ
〔万六九四〇〕赤人・夫雑十浅茅〔三三五〇〕

かり 家持

二六 ますらをのよびたてしかばさを鹿のむなわけゆくぞ秋の萩原

〔万二十四三三三〕

【頭】契冲云、「よびたてしかば」とは、狩声出して鹿をおひ出すをいふ也。

二六 いなみ野にかりするしたひ草しげみむへきはみえて弓のはずみゆ
〔夫雑十八二六九四〕よみ人しらず

【頭】『和名抄』征戦具云、「釈名」云、弓末曰彌〔和名由美波敷〕。

二六 山のべにさちをのねらひおそろしみを鹿鳴なりつまのめをほり
〔万十二二四九〕夫秋三鹿〔四九六〕よみ人しらず

二六 梓弓末のはらのにとがりする君がゆづるのたえんとおもへや
〔同十一二六三八〕新勅恋四八七〇よみ人しらず・夫雑四野〔九八三〕よみ人しらず

【頭】契冲云、「とかり」は鳥狩也。鷹をとりといへり。『源氏』にも、「鳥のせうやうのものゝやうなるは」といへり。

二六 たつか弓手にとり持て朝狩に君はたちいぬたなぐらの野に
〔万十九四五七〕作者未詳・夫雑十八旅〔六九六〕よみ人しらず

左大弁紀いひまろ〔此名誤れり〕

ともし

【頭】『和名抄』射芸類云、「統搜神記」云、聶支少時、家貧常照射〔今按俗止毛之〕。

つらゆき

二六 五月山木の下やみにともす火は鹿の立所のしるべなりけり
〔拾夏二二七〕家〔一九〕

二六八 をぐら山山ともしの松のいくそたび我鹿の音を鳴てへぬらん

【頭】『斎宮女御集』(一八四・五三六・五七・四四)

もしほやく煙になるゝあまごろもいくそたびかはそでのぬれける

二六九 逢ことをともしモリカスの鹿のうちむれてめをだにみせばいるべきものを

したがふ

二七〇 子規まつにつけてやともしする人も山べに夜をあかすらん

〈拾遺(二六)・家(一一・五七)〉

わし

二七二 つくはねにかぐなくわしのねをのみか鳴渡りならんあふとはなしに

〈万十四(三三九)〉

二七三 しふた越中にのふたがみ山に驚ぞ子うむてふさしはにも君がみためにわし

ぞ子うむてふ

〈同十六(三八二)・夫雑九(二六三)よみ人しらず〉

【頭】契沖云、「『延喜式』に、「翳」を「サシバ」とよめり。又『唐韵』に、「翳ハ羽葆也」ともあり。」

大鷹

二七三 やかたをのましろの鷹をひきすゑて君かみゆきにあはせつるかな

【頭】「やかた尾」の事は「春草」にくはしくはいはれたり。

二七四 あら鷹の今は雲るになりぬればと夫きてもやぬ色いとみするてす夫だぬき

〈夫雑九(二七六)よみ人しらず・色(六八)〉

【頭】『和名抄』鷹犬具云、「『文選』西京賦云「青骹撃於鞞下」(鞞音溝

訓太加太沼岐)。」

今按ずるに、「たか」の反「た」なり。「た」を「て」にかよはせて、「手だぬき」とはいふなるべし。

二七五 恨むべき心おほ鷹手にすゑてかりにのみくる人やなになり

二七六 へをつけて山に入にしあらたかのいとをきにくき空言なせそ

〈夫雑九(二七六)よみ人しらず〉

【頭】「へを」は延緒の義也。「はえ」の約「へ」なればなり。『和名』同条云、「『唐韵』云、「攀(今案一字向訓、在鷹阿之平、在狗岐豆奈)所_三以綴鷹狗也」とみえたり。是今いふ「へを」なり。

小鷹

おちのわう女(未詳)

二七七 庭草を鶺鴒すむまではらはせじ小鷹手に居こん人のため

【頭】『後撰』雑三(二三五) よみ人しらず
わがためにをきにくかりしはしたかの人の手にありときくはまことか

二七六 かりしてのほどなき身にもはし鷹のねなかきはらふ物にざりける

二七九 つらわするとは後・茶しとも恨みざらん後・茶箸鷹のとかへる山のしひもみぢず

〈後雑二(二七)よみ人しらず・兼盛集(一四八)〉

【頭】『狭衣』三(二二)
ことのはを猶やたのまんはしたかのとかへる山はもみぢしぬとも

二八〇 かりにてもすゑこじとぞ思ふはしたかの鈴カスすゞるなるなをの代立も杜すれ

〈代恋一(二九三)よみ人しらず〉

【頭】『書紀』仁徳紀云、「四十三年秋九月、依網屯倉阿弭子捕異鳥、

獻於天皇〔中略〕天皇召酒君、示鳥曰、是何鳥、对言、〔中略〕百
濟俗号此鳥曰「俱知」〔是今時鷹也〕、乃授酒君令養馴、〔中略〕酒
君則以章縞、著其足以二八鈴、著其尾居腕上、獻天皇云云。

きじ

二八二 年をへてかへりかた野のすもりこの君にしあへば飛立ぬべし

二八七 春の野に朝鳴ききの妻こひにおのがありか人をにしられて

〔万八〕四〇家持・拾春(二)・金玉(二)・古本『赤人集』(一)二六・卅四

二八二 すぎの野にさをどるきじのいちじろく鳴しもなかんこもり妻かも

〔同十九四〕四〇家持・夫春五(二)七七・又雜四野九(三)六・第五(三)二〇重出

【頭】契沖云、「さ」はそへていふ詞也。たゞ「躍るきぎす」といふこと
也。

二八三 足曳のやつをの雉子鳴とよむあさけの姿みればかなしも

〔同四二四九〕

二八四 春きじの鳴高円にさくら花ちりながらふるみん人もがな

〔同十(二)八六六〕・夫春五雉(二)七七人丸

二八五 はるの野におもひねきじのひとつがひ我子は鷹におぢやしぬらん

二八六 ねぐらなる霜うちはらひ立きじの空にこそとれ人のこゝろを

【頭】『金葉』恋下(五〇六) よみ人しらず

ぬす人といふもことわりさよなかにきみがこゝろをとりにきたれば

二八八 くりこまの山に朝たつ雉子よりもわれをばかりにおもひけるかな
〔大(二)二六〕夫雜二山(八五七三)よみ人しらず

はと

【頭】契沖云、「きじ」「はと」「うづら」を鳥の部にはおかでこゝにしも

入れたるは、「はとふく秋」などよみてはらかりとるものなる故也。

二八九 われをあきとふる露なれば山鳩の鳴こそわたれ君まつのに

〔夫雜九(二)八三〕よみ人しらず

うづら 家持

二九〇 鶉なくふるきさとより思へどもなにぞも妹に逢ふよしもなき

〔万四(七)七五〕・夫秋五(五)九五

二九二 野とならばうづらと成て鳴をらんかりにだにやは人のこざらん

〔古雜下(二)五五〕よみ人しらず・伊(三)五三・古本『業平集』(一)六六・三三三

二九二 鶉なくふるき都の秋はぎをおもふ人どはあひみつるかな

〔万八(二)五五〕・新拾秋上(三)五三よみ人しらず・『家持集』(一)三四・二二五

朗(三)三六

【頭】此うた、『新拾遺』と『朗詠』には「うづらなくいはれの野への秋
はぎを思ふ人ともみつるけふかな」とあり。殊に『朗詠』には、作者を
「丹後国人」としてさるは、より所ありてか、おぼつかなし。

おほたかがり

二九三 おほきたか今としなれば大荒木の森の下くさ人もかりけり

〔貫之集』(一)四〇〕・夫冬三鷹(七)七三

二四 霜がれになりにしへのべとしらねばやはかなく人のかりにきつらん
〈統後恋四(九三五)よみ人しらす〉

二五 冬草の枯れははてなでしかすがに今としなればかりにのみくる

二六 霜かれの草葉をうしとおもへばや冬野ののべを人のかるらん
〈貫之集〉(一〇・五二八・第六(三五六)重出)

以上〔蔵ナシ〕 業平

二七 狩くらししたなばたつめに宿からん天の河原に我は来にけり

〈古騎旅四(八業平・伊(四七)・新撰(一九〇)・家(四四・四七・三〇・四三)〉

二八 ひととせに一たびきます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

〈同(四一九)紀有常・伊(四八)・古本『業平集』(一四六・五四八・三二)〉

二九 すまのせき秋はぎしのぎ駒なべて鷹狩をだにせでやわかれん
いはせのに万新

〈万(十九四(四九)・新拾離別(七四)家持・夫秋五小鷹狩(五六五)よみ人しらす〉

【頭】契冲云、「秋の鳥屋出の鷹をつかひそむるを「はつとがり」といふ。小鷹かりとはこと也」。

小鷹がり やかもち

三〇 思ひいでゝ恋しくもあるか粟津野の小萩が原にわが行しかり
近江

〈夫秋二萩(四一四)伊勢〉

三一 秋の野にかりぞくれぬる女郎花こよひばかりの宿もかさなん
は後

〈後拾秋五(三四)元輔・『貫之集』(一五・五三)『元輔集』(一三六)〉

三二 かりにとて我はきつれどをみなべしみるに心ぞおもひつきぬる
〈拾秋(二六五)貫之・家(一三九)〉

三三 花の色を久しきものとおもはねば我は野山をかりにこそみれ
〈家(一一〇)〉

三四 百草の花はみゆれど女郎花さける中にとかりくらしてん
がなだをりくし家

〈同(一三八〇)〉

以上 つらゆき

三五 かりにとてのべにぞきつる鈴虫の声はさやけさしるべなりけり

〈第六(二〇五)重出〉

野辺

【頭】契冲云、「さきに「四季の野」「雑の野」の題ありて、また此題有べくもあらず。此題のうた十八首、みな春野遊、秋野遊のうた也。されば、此帖の目録并にこの題にいたりては、「野遊」を「野辺」と見そんじてうつしあやまれるなるべし。第一帖の惣目録に「野べ」とあるは、また「辺」を仮字にうつしかへたるにこそ。「鷹狩」と「行幸」とのあはひ、いかにも野遊そのよしあり」。

素性

三六 いざけふは春の山べにまじりなん暮なばなげの花の陰かは

〈古春下(五五)・新撰(五七)・家(一三三・五二四)〉

三七 春の野のあさちが上に思ふどちあそべるけふは忘れめやは
日万夫
なげふをば夫
も万夫

〈万(一八八〇)・夫春五野遊(二七〇)よみ人しらす(五二〇六)〉

二〇八 はる霞たつかすが野を立たかへり我はあひまみんいやとしのほに

〈同二八二〉・『家持集』(一四・五四) 〔人麿集〕 四六三・『赤人集』 一七四〇

二〇九 春の野に心のやらんとおもふどち契たり万万契しけふは暮こずもあらなん

〈同二八三〉・『赤人集』(一七五・五五) 〔人麿集〕 四六三

貫之

二一〇 こゝにしてけふはくらさん春の野の長き心をおもふかぎりは

〈家一三四〉

二一一 春たくれば花をみんと思ふ心こそこのべの霞にともに立たいづれ

〈後春下二二二〉よるかのあそん・寛(三三)・新万(五二)・八(七六)

二一二 あだにこそ野辺の花見に我こしかながくし日を暮しつる哉

二一三 のべに出て見るとも花のさかざらば何に心をなぐさめてこん

二一四 思ふどち春の山べに打うたれてそこともしらぬ旅いねしてしか

〈古春下二二二〉そせい・家(一七・五九)

二一五 百草の花のひもとく秋の野に思たひみだれたん人なとがめそ

〈同秋上二四〇〉よみ人しらず・『小町集』(一四三)

二一六 秋の野は道もゆかれずともすれば花のあたりにめのみとまりて

【頭】『後撰』恋一(五五)

よみ人しらず
おもふとは思ふものからともすればわする草の花にやはあらぬ

二一七 宮人のかずはしりにき女郎花いづこととはゞいかゞこたへむ

〔躬恒集〕(四一八七・五九〇)

二一八 かりにとてくべかりけりや秋の野の花見るほどに日は暮むれにけり

〔拾秋二六三〕よみ人しらず

二一九 紅葉見に君におくれてひねもすに思はぬ山をおもひつる哉

【頭】『拾遺』冬(三三五)

よみ人しらず
ひねもすにみれどもあかぬもみぢばはいかなる山のあらしなるらん

二二〇 かぎりなく我思ふ人のゆく野べは色はやちらさめ花をぞ咲はける

〔貫之集〕(一八七)〔元輔集〕(一三三)

二二一 秋風はすゞしくなりぬ駒なべていざ野に行なん秋の花見に

〔万十二〇三〕・新拾秋上(三五六)人丸・古本『人丸集』(五六一)

二二二 はぎの花をばな葛花撫子の花女郎花また藤袴朝がほの花

二二三 秋の野に咲たる花をてにをりてかきかぞふれば七くさの花

〔万八二五七〕・夫秋二秋花(四三九)

二二四 山の上のおくら

〔同二五二〕

みゆき

【頭】真淵云、「今上に行幸、上皇に御幸といふは、『西宮記』などより其

わかち見えて、『三代実録』まではそのわかちみえず云々」。此説よろ

し。今按ずるに、『類聚国史』の標目にも、「天皇行幸」「太上天皇行

幸」とあり。

「ひと日もみゆき」とは、雪のうたなり。こゝに入たる事いかゞ。おぼつかなし。

二三四 ふるさとは吉野の山し近ければひと日もみゆきふらぬ日はなしぞなき新

〈古冬(三三)よみ人しらず・新撰(三三)〉

二三五 玉津島入江このわたの統・代家の小松老まつは統・家にけりふるきみゆきのことやとはまし

〈続古雑中(二六六)是則・代雑(二三八)・家四(二)・夫雑五島(二〇四七)・同六河(二〇九三)〉

うみの上女わう〔志貴皇子御女〕

【頭】「うなかみの女王」とよむべし。「うみの上」とあるはわろし。

二三六 梓弓つまひくよとのとほとにも君が行幸を聞きかぐしよもがうれしさ

〈万(四)五三〉

左大臣橘朝臣

二三七 むぐらはふ賤しき宿も大君まさん万の行幸としらば玉しかましを

〈同十九(四二七)・統後拾雑中(二〇九七)・第六(三六七)重出〉

右大弁八束〔大政大臣藤原房前男真楯先名〕

二三八 松陰なまきの清き浜なまきべに玉しかば君をみ夫きまささんか清き浜なまきべに

〈同四七(二)・夫雑十四玉(五三三)〉

二三九 しらさ紀伊きはさきありありまで万に行幸かくあらば大船にまかぢしし万げぬき又かへりみん

〈同九(二六八)〉

【頭】『万葉』二十(四三六八) 丸子部佐仕

久自我波々佐気久阿利麻弓志富布祢尔麻可知之自奴伎和波可敝里許牟

二三〇 大君のみゆきのままにまわもことに我せわこが手枕まかず月ぞへにける

〈同六(一〇三)家持〉

せり河に行幸し給ふ時に 行平中納言〔阿保親王男〕

【頭】『袖中抄』卷五云、「芹川野行幸といふは、鳥羽の南のせり河といふことうたがひなし云々」。

ふことうたがひなし云々」。

二三一 さがの山みゆきたえ後ふりにし芹川せり川の野のへの古道跡はありけり

〈後雑一(二〇七五)〉

二三二 篠浪や志賀近江のからささき行幸して大宮人のふねまぢかねつ万・夫・袖よそひせり

〈万(一三)〇人丸・夫雑八崎(三三二九)・袖(四七三)〉

(旭川校助教授)